

良妻賢母はブラック企業

大瀧 雅世

出産は女性にしかできない仕事である。当然のことであるが、その仕事を担えることを私は誇りに思う。しかし、その分女性だけに負担がかかることも多々ある。どんなに協力的な夫であっても、ツワリは代わってもらえないし、陣痛や分娩も交代不可能である。そのような身体的負担だけでなく、出産にあたって仕事に穴をあけるといった職場への後ろめたさ、精神的負担を感じるのも女性である。

私は2008年に向学の念から博士課程に進学した。そして2010年に結婚、2012年6月に第一子を出産し、2013年4月に職場復帰をして現在に至る。結婚前の私は、当然のことながら仕事中心の生活であり、仕事に全力投球していた。研修や勉強会にも精力的に参加していたし、夜中まで残業することも頻繁にあった。休日、自宅にいても仕事をしていることが多く、仕事を楽しみ、充実した生活と思っていた。しかし思い返してみると、仕事にのめりこみすぎていて、頭がかたく、いい仕事をしていたとは言えない。結婚して、子どもを持った今だから言えることは、時間を多く費やすことが、いい仕事をしているということではないということ、時間を上手に調整することにより、バランスがとりやすくなるということである。人を相手にする仕事である以上、可能な限り、真摯に向き合うことが求められる。その向き合う方法はさまざまであるが、要は、量よりも質を大事にしなくてはいけないということが、結婚してやっと気づけた点である。

私の場合、結婚しても生活スタイルを大きく変える必要はなかった。夫は私よりも多忙な人であり、働く女性に対する理解がある人であったためである。それでも、結婚を機に、私の中で大きな変化があった。夜中まで仕事をするのが激減し、自宅への持ち帰り仕事は今までの3分の1程度になった。それは、妻として家事をしっかり行いたいということ、夫婦で過ごす時間を大事にしたいということ、そういうメリハリのある暮らしを私自身が望むようになったからである。仕事にかかる時間は、量としてみると減少したが、仕事ばかりしていたときよりも心にゆとりが生まれ、質としては向上したと思う。さらに、結婚したことにより、30年以上かけて培われた生活習慣に新しい風が吹き、日常生活だけではなく、仕事においても、異なる価値観を受け入れる態勢ができたように感じている。

ところで、保育園に子どもを預けることに関して、賛否両論ある。1歳に満たないときから預けてかわいそうだと言われたこともあるし、早くから同年代のお友だちと過ごすことにより社会性が身に付くと言われたこともある。子どもの成長に環境は重要因子であるが、もともと子どもの成長は個人差があるため、どの程度の影響があるのかわからない。これらについてのエビデンスが私の知る限りではないように思う。私の専門は老年医学、その中でも認知症であるが、出産後、子どもの成長に関する研究疑問がいくつかあがった。今まで全く興味がなかった発達領域であるが、医学面ではなく社会学的側面からの研究も面

白いと感じている。保育園に預ける後ろめたさ、専業で子育てをして発達に影響があるのではないかという不安、そういうことに対してエビデンスを提示してもらえると、母親の安心、安定した子育てにつながるのではないだろうか。保育園の良い点、専業で子育てをする良い点を明確にして、それぞれが取り入れることは、未来を担う子どもにとってプラスに働くと考える。実際に保育園を利用して感じることは、保育園に行き教わってくることもたくさんあるし、友だちの影響で成長することもある反面、病気をもらってくることもあるし、病み上がりであっても仕事を優先して預かってもらうこともあるため、そういうとき、申し訳ないと思うし、かわいそうだと思う。母親として、保育園に預けることを後ろめたく思うことも多々あるため、保育園に預けるメリットのエビデンスが欲しい今日この頃である。

仕事と生活の調和を考えたとき、仕事を中心にした観点からいけば、結婚してから出産まで、最も仕事と生活のバランスがよく、調和した暮らしを送っていたように思う。仕事をセーブすることなく、行きたい研修に参加し、泊りがけの学会にも行き、職場の飲み会にも参加し、そしてプライベートも充実していたし、家事もそれなりに納得のいく形で行っていた。反面、出産してからの勤務は、決して満足のものではないし、家事も手をかけられないことが増えた。職場は業務内容を配慮してくれるし、急な休みでも調整してくれて、ワーキングママとしてはこれ以上ない環境である。大変ありがたいことであるが、物足りなさとしり込みを感じるのも事実である。何人子どもが生まれても全く変わりなく働く男性同僚と、自分自身の働き方を比較してしまうこともある。私のように恵まれた環境で働いていても、他の同僚と同じ業務内容をこなせないことにストレスがあったり、子どもの都合で休ませてもらうことが重なることを申し訳なく思ったり、これらの気持ちはどうしても生じてしまう。男性も育休を取得したり、主夫になったりしている時代であるが、産休に関しては子どもを産む以上、女性が仕事を離れるしかない。そしてまだまだ女性が育休を取得し、保育園からのお迎えコールに応じる家庭が多い現状があり、我が家も然りである。どんなに恵まれた職場環境であっても、心の中の葛藤やストレスは避けられない。ただ、生活の観点から言えば、出産後のほうが断然充実している。仕事思うようにできなくても、家事が滞っても、忙しい毎日であっても、わが子が元気に成長していく姿は、それだけで癒しであり、楽しみであり、素晴らしいと感じている。つまり、仕事と生活の調和と一口に言っても、どの観点からの調和であるか、優先順位によっても異なる見解になるのではないだろうか。

我が家にはルールがある。いつも一緒にいることはできなくても、働いていることを言い訳にしない子育てをして、子どもに愛情をしっかりと注ぐということである。具体的には、レトルト食品に頼らず、離乳食やおやつを手作りすること、一緒にいるときは全力で一緒に遊ぶ時間を持つこと、当たり前のことかもしれないが、ワーキングママにとってそれを実践することは結構難しい。そのしわ寄せは、私の余暇活動時間の減少・削減という形となる。毎日、職場から保育園に直行し、帰宅後一緒に遊び、食事の支度をして食べさせて、

お風呂にいられて寝かしつけ、夫の帰宅に合わせて夫の夕食準備をして、後片付けをしていると日付が変わっている。職場復帰した当初は、日付が変わったあたりから自分のゴールデンタイムと称して仕事をしたり、本を読んだり、余暇活動をしていた。しかし、そのような生活は長くは続かず、睡眠時間を優先するようになり、結局、今の私に余暇時間はない。おまけに、仕事もきちんとこなせず、職場に迷惑ばかりかけている。このような状況でも、出産したことを後悔したことはないし、わが子にイライラすることもない。ただ、職場に迷惑をかけて、わが子にさみしい思いをさせてまで、働き続けることを疑問に思ったことはあるし、どうしたらいいのかわからず泣いたこともある。そして、仕事を辞めた方がいいのではないかと考えたこともある。今は日々の生活に追われて、そのことを考える余裕さえないが、結局はできることしかできない、という結論に至った。決して仕事と育児の両立ができているとは言えないし、心身ともに余裕のある暮らしとは言い難い。それでも、職場復帰してから、私は体調を崩さず自分都合の休暇はない。それは一種の充実した生活ということなのかもしれないと感じている。

社会で仕事を持つ私、妻としての仕事を持つ私、母としての仕事を持つ私、どの仕事も完璧にこなすことはできないし、理想はあってもゴールはない仕事である。以前、夫も私も外で仕事をしているという対等の立場であるにも関わらず、家庭における私の仕事が夫と比較して多すぎるのではないかと、ということをお夫に対して申し出たところ、「良妻賢母はブラック企業だね」という冗談がかえってきた。仕事を続けながら育児もこなそうとすることは、そもそも欲張りなのかもしれない。休暇という休暇がなく、余暇活動を行う時間がなく、そして終わりが見えない、という意味では、ブラック企業である。家族への愛があるからこそ、続けられる仕事である。良妻賢母であればあろうとするほど、できないことにストレスを感じることになる。仕事をしながら育児をしていく良妻賢母がホワイト企業となるためには、何をどのように改善したらいいのだろうか。子育て支援の一環で、育休期間の延長という話もあるが、職場に迷惑をかけることに変わりはないし、育児が行いやすくなるとは到底思えない。待機児童がいなくなるように保育園が増えれば、働きやすくなるかもしれないが、仕事をしながら育児をする大変さは変わらない。そう考えたとき、一番効果的なことは、夫からの労いがあることだと私は思う。妻として母としてやって当然という態度ではなく、頑張りを認めてもらえること、「ありがとう」と言ってもらえることが明日への活力になるような気がする。さらに、妻として母として行っている料理や家事といった業務を、義務ではなく、余暇活動として捉えることができれば、心の負担が軽くなり、ゆとりが生まれるのではないだろうか。

私は今、幸せである。睡眠時間が少なくても、泊りがけの研修に行かなくても、自分の時間がなくても幸せである。そう思えるということは、今の私が仕事と生活の調和がとれている状態だということなのかもしれない。仕事と生活の調和は永遠の課題であり、結論がでない問題ではないだろうか。自分自身が調和のとれている状態であると判断するか否かであって、他人が決められることではない。ただ言えることは、仕事と生活の調和が

保たれる条件として、幸せであると感じられることが挙げられると思う。職場に対して申し訳ないと思う気持ちは常にあるが、素晴らしい上司や同僚に恵まれていることは、とても幸せなことだと思うし、大好きな夫とかけがえのないわが子と暮らすことは、何物にもかえられない幸せである。すべてにおいて欲を言えばきりが無い。もっと仕事をしたい、もっと研修に行きたい、もっと学会に行きたい、もっと勉強がしたい、もっと子どもと過ごしたい、もっと夫に協力してもらいたい、もっと、もっと・・・といくらでも出てくる。“もっと”と求める前に今自分ができていることを精一杯やっているのか、自分自身に問いかけてみると、おそらく多くの場合は NO である。与えられた環境や時間をコントロールして最大の効果を生み出すこと、それこそが最もカッコイイ女性の働き方なのかもしれない。たとえ良妻賢母がブラック企業だとしても、企業側に改善を求めるだけでなく、自分自身で仕事と生活の調和がとれる状態を模索していき、幸せだと思える生き方をしたい。